

公民館の図書室は 学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2026年(令和8年)
5月5日 第756号

PDF版

国立市中 1-15-1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

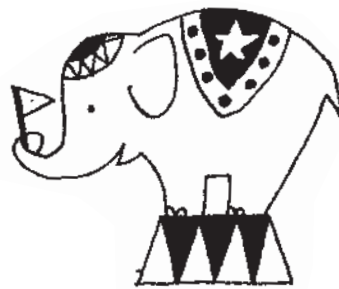
(2025年11月29日開催 図書室のつどい 参加者の感想)

星野俊樹 著

『とびこえる教室』

—フェミニズムと出会った僕が
子どもたちと考えた「ふつう」—

内野 光昭



私が星野俊樹さんと初めて会ったのは、中学1年生のとき、同じ中高一貫の私立中学に入学した際でした。私はサッカー部、星野さんは卓球部に所属しており、クラスも一緒になることがほとんどなかったため、当時はあまり接点がありませんでした。

しかし高校に進学すると状況が変わりました。私はそれまで西八王子駅からバスで通っていたのですが、高校に入ってから秋川駅を利用することが増え、星野さんも同じ駅を使っていたため、一緒に帰る機会が多くなりました。また、たまたま私の仲の良い女子同級生が星野さんとも親しく、そのこともあって自然と交流が深まりました。男女別学だったため、男子が女子と気軽に話すことは珍しかったのですが、星野さんはその垣根を越え、誰とでも分け隔てなく話せる存在だったと記憶しています。

高校2年生で同じクラスになってからは、さらに話す機会が増えました。一貫校ゆえ、一定の成績があれば大学まで進学できる環境でしたが、星野さんは高校2年頃から受験勉強に力を入れ、エスカレーター進学に頼らず難関大学を目指していました。当時の学校では珍しく、その姿勢がとても印象的でした。また、学校行事にも積極的で、高校の学園祭では模図(もづ)かずお氏の『漂流教室』を題材にしたドラマを、星野さんの脚本・監督で撮影したことは、今でも忘れられない思い出です。やがて星野さんは超難関大学に現役合格し、しばらく会う機会がありませんでしたが、人づてに

カミングアウトしたと聞いたときは驚くと同時に、不思議な安堵感も覚えました。その後、社会に出て雑誌の会社に入り、いつのまにか教師になり、さらに大学院に進み、再び教育の現場へ。そして最近では教職を離れ、『とびこえる教室』を上梓するなど、そのバイタリティにはただただ感銘を受けました。書籍の刊行を知り、すぐに予約して拝読しました。

本書を通じて、これまで知らなかった星野さんの多面的な側面を知りました。家庭環境、学歴コンプレックス、体育祭での上半身裸で踊らされた背景が率直に綴られており、そこに込められた勇気と切実な思いが強く伝わってきました。同時に、そうした葛藤を知らずに無邪気に接していた当時の自分に、思わず喝を入れたくなる気持ちにもなりました。

その後、星野さんが国立市公民館で講演を行うことをFacebookで知り、地元であることもあり参加しました。当日は、これまで学校現場で実践してきた「ふつう」や「ジェンダー」についての話を聞き、さらに強く勇気づけられました。また、講演を通じて、星野さんが多くの人—かつての同僚や上司、そして悩みを抱えた方々—に希望を与えている姿がとても眩しく映りました。

講演後には短い時間ながら言葉を交わすこともできました。高校時代と変わったようで、変わっていないようでもあり、なんとも言えない懐かしさと感慨を覚えました。

(時事通信社)

〈2026 年 1 月 18 日開催 図書室のつどい 参加者の感想〉

「地名の由来」を聴講して

— 今尾恵介氏のお話 —

佐藤 良美



「公民館だより」は毎号楽しみに目を通しております。紙上に興味のある講演会が載っていると申込期日を忘れぬ様メモ書きをするも年齢のせいかわかりすることもあり、定員が既にいっぱいタッチの差で残念な時もあります。企画編成の良さに公民館の関係者の方には感謝しています。今回も是非聴きたいタイトルで、定員仲間に入りま

すよう祈る気持ちでした。少しでも知識を得ての街歩きはその地名の由来関係の諸々のことにますます関心が持て楽しくなります。地名が漢字の場合、その漢字より由来が想像出来そうなのがあり合致する点があると一人合点し自己満足。命名したその時代の方も後世に伝えたく考えたのではと思うほどです。その想像可能であった地名がカタカナに或いはひらがなに変化してしまいイメージがガラリと変わってしまうもの。たとえば A 市と B 市が合併してこ

れあり、と言うような市の名になって首をかしげてしまうもの。気候の変動が激しく地形そのものが変化して名を変えねばおかしいと思われるものは、ドローンで俯瞰的に見られたらすんなり納得できます。土地の高低の差による上下の違いは高度は違っても本質的なことは変わらないと思うが、横につながる変化のうちの一つである曲がりくねった川の流れを人工的に直線にした場合、以前の資料がその

場にあれば、前はどうかだったのかと連続して関心を持ち今に至っています。地名に興味を膨らんで日常生活の中に彩りができ、この終わりのない分野の愉しみは、地名の由来との出会いがくれた宝ものの感覚です。

日本は小さな島国で土地の面積も少なく、自然災害による土地の侵蝕変化も多く、変化する地名が教えてくれることがとても多いのではと感じた次第です。そうした周りの変化の名前を通しての見聞きが、自覚はしていないものの日常生活の中でのものの見方、工夫の仕方に入り込んでいるのではと思いました。

話はそれますが、人の命の誕生の際つける名前にも顔があり生を受けたその時代、時代の出来事等で特徴があり、つけられた名前が一生持ち続けられる二つと替わりのないプレゼントとなります。名付ける親は真剣に考え、変える時には又それなりの理由があるのであるからプロセスに思いを込め味わいたい、知りたい、講演から得られたことを生かして日々を送りたいと、聴講後に道々新たな気分を頂戴した次第でした。

〈今尾さんの本〉

『惹きつけ、惑わす、不思議な力 地名の魔力』(PHP 研究所)、『地名散歩』(KADOKAWA) など多数

くにたちブッククラブ

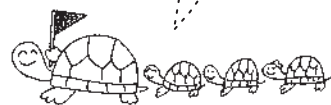
— なぜ、その道を選んだのか —

芥川龍之介『藪の中』(新潮文庫)

※文庫の書名は『地獄変・偷盗』

講師 山岸 郁子 (日本大学・日本近代文学)
とき 5月14日(木) 夜7時半～9時半
ところ 公民館 3階講座室
申込先 公民館 ☎(572)5141

この講座は、
あらかじめ作品を読んできて、
参加者が「読み」を出しあいます。
講師のお話も聞きます。



▲ 講座詳細

* 5月から、8回にわたり様々な日本の文学作品を味わう「くにたちブッククラブ」が始まります。年間予定など、詳しくはホームページをご確認ください。

新着図書から

〈哲学 心理学 宗教〉

日本を知る

今野真二 (みすず書房)

121

福音派

加藤喜之 (中央公論新社)

198

〈歴史〉

つくられた日本の自然

大貫恵美子 (みすず書房)

210

日本に生きた〈ディアスポラ〉

メスロピヤン・メリネ (藤原書店)

289

〈社会科学〉

ラオスを知るための60章 菊池陽子・編著 (明石書店)

302

ナイジェリアを知るための56章

島田周平・編著 (明石書店)

302

ブルキナファソを知るための64章

清水貴夫・編著 (明石書店)

302

現代オーストラリアを知るための60章

水上徹男・編著 (明石書店)

302

ガーナを知るための57章 山田肖子・編著 (明石書店)

302

ナショナリズムとは何か 中井遼 (中央公論新社)

311

ともに生きるための「世界ルール」

阿久澤麻理子 (解放出版社)

316

剥き出しの帝国 カインディ・アンドリュース (明石書店)

316

アメリカ史とレイシズム

中条献 (岩波書店)

316

北方領土を知るための63章 名越健郎・編著 (明石書店)

319

「殺された側」から「殺した側」へ、こころを伝えるとい

藤井誠二 (光文社)

326

裁判官はなぜ葬られたか

岡口基一 (講談社)

327

ルッキズムってなんだろう?

西倉実季 (平凡社)

361

生活史の方法 岸政彦 (筑摩書房)

365

上野さん、主婦の私の当事者研究につきあってください

上野千鶴子 (晶文社)

367

なぜ男女格差はなくなるのか 田中世紀 (講談社)

367

繋がり方がわからない

門賀美央子 (双葉社)

367

入門男らしさの歴史

弓削尚子 (筑摩書房)

367

ジェンダー平等世界一イライザ・リード (明石書店)

367

福祉は誰のため?

竹端寛 (筑摩書房)

369

戦争の美術史

宮下規久朗 (岩波書店)

702

〈文学〉

三島由紀夫との六十年

高橋睦郎 (平凡社)

910

谷川俊太郎の日本語

今野真二 (光文社)

911

さよならジャバウォック

伊坂幸太郎 (双葉社)

911

「なむ」の来歴 斎藤真理子 (イースト・プレス)

その本はまだルリールされていない 坂本葵 (平凡社)

913

介護未満の父に起きたこと ジェーン・スー (新潮社)

謎の香りはパン屋から

土屋うさぎ (宝島社)

913

殺し屋の営業術

ドリアン助川 (新潮社)

913

その針がさすのは

野宮有 (講談社)

913

本を作るのも楽しいですが、売るのはもっと楽しいです。

羽田圭介 (新潮社)

913

涙の箱

金承福 (岩波書店)

923

障害文学短編集

ハンガン (評論社)

923

悲しき虎

W. フォークナー (平凡社)

933

上野千鶴子 (晶文社)

ネージュ・シンノ (新潮社)

953

図書室で読める雑誌

〈月刊誌〉

中央公論

文藝春秋

東京人

世界

婦人公論

婦人之友

教育

月刊公民館

月刊社会教育

社会教育

月刊福祉

きょうの健康

芸術新潮

&プレミアム

キネマ旬報

音楽の友

山と溪谷

本の雑誌

現代詩手帖

新潮

図書

ちくま

未来

〈週刊誌・週刊紙〉

AERA

週刊文春

週刊読書人

〈その他〉

サライ (月2回刊)

ふえみん (月3回刊)

明日の友 (隔月刊)

くらしと教育をつなぐWe (隔月刊)

暮らしの手帖 (隔月刊)

多摩のあゆみ (季刊)

〈外国語新聞〉

東亜日報 (ハングル)

人民日報 (中国語)

ジャパン・タイムズ (英語)

〈外国語雑誌〉

新東亜 (ハングル)

青年文摘 (中国語)

読者 (中国語)

タイム (英語)

ひらがなタイムズ (日本語と英語)



図書室のしごと

どうすれば幸せに 生きるこじがでるのか

ーウエルビーイング学入門ー

お話 前野 隆司 (武蔵野大学ウエルビーイング学部長、
慶応義塾大学名誉教授)

人はどうすればもっと幸せに生きることができなのか。こうした「幸せ」に関するテーマは、長く哲学研究などによって深められてきました。しかし、近年ではより客観的な視点から、人々が「幸せ」を感じるメカニズムを科学的に追究しようとする総合的な学問研究が進展しています。

今回お招きする前野さんは、「ウエルビーイング」を科学的に研究する学問の普及や体系化に尽力され、武蔵野大学にて世界で初めて設立されたウエルビーイング学部の学部長を務められています。今日さまざまな場面で使われるようになった「ウエルビーイング」とはなにか、その可能性などについて、お話を伺います。

〈前野さんの本〉『幸せのメカニズム』(講談社)、『ウエルビーイング学入門』(武蔵野大学出版会) など多数

とき 6月3日(水)夜7時〜9時

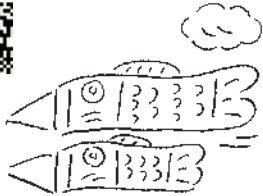
ところ 公民館 3階講座室

定員 35名(申込先着順)

申込先 5月13日(水)朝9時

電話または申込フォームより

☎ 042(572)5141



〈私の本棚から 第2回〉

片桐はいり著

『わたしのマトカ』



高遠 敬子

映画『かもめ食堂』(2006)を知っていますか? フィンランドで食堂を営む主人公サチエ(小林聡美)と、ひよんなことからそこに加わるミドリ(片桐はいり)、マサコ(もたいまさこ)。3人の女性を中心に地元の人々との交流、美味しい食事を通して日々の幸せに気づかせてくれる素敵な映画です。

『わたしのマトカ』は、片桐はいりさんが、映画撮影中のオフでの出来事や撮影終了後に行った農場体験などをエッセイにまとめたものです。独特の語り口調とユーモラス、鋭い洞察力で読者を惹きつけていきます。「マトカ」とは、フィンランド語で「旅」を意味します。私も旅行が大好きで世界70か国を旅しました。はいりさんの弟さんが住むグアテマラにも行ったことがあります。さて、この本の魅力はフィンランドだけでなく香港やニューヨーク、カンボジアなどの話もさり気なく入れ、クスツと笑いに誘うところなんです。

そして特に私が好きなところは、ことばが分からなくても、単語やジェスチャーでつながりだその先にある「あつ、心が通じ合えた!」という瞬間を一緒に感じられることです。例

えば、トラム(路面電車)の仏頂面の運転手のおじさんに「博物館に行きたい。」「料金はいくら?」と片言の英語で伝えても無表情。

甘える余地なし。お互い英語が難しいから大変な様子。しかし、目的地に着いてはいりさんがおじぎすると、「うん、うん」と口角を上げておじさんとのやりとり、その場にはいない私までジーンとしてしまうのです。

これは、やはり、はいりさんの人と通じ合うとする姿勢があるからだと思うのです。また、はいりさんがその国で最初に覚えることばは「こんにちは」「ありがとう」「ごめんなさい」そして「おいしい」。でも、フィンランドで最初に覚えたことばは、「これを1リットルください」でした。市場では、野菜も果物も量り売りでバケツで買うからです。私もニューヨークでバケツいっぱいチェリーやリンゴを買ったことを思い出しくなりました。「その国で最初に覚えたことばは何か?」意識していなかったこの着眼点にハッとしてしまいました。

さてさて、『かもめ食堂』は、今年で上映20周年。『わたしのマトカ』を読んで、ぜひ皆さんも心の中のフィンランドの旅に出かけてみませんか? 併せて映画の原作『かもめ食堂』もおススメします。

・『わたしのマトカ』片桐はいり (幻冬舎)

・参考『かもめ食堂』群ようこ (幻冬舎)